初級学習者の作文にみられる，「に」の過剰使用が現れた文の特徴について

山口　　薫

要　旨

日本語初級レベルの学習者によって書かれた作文には，助詞「に」の過剰使用が多く観察される。これについて調べるため，外国人留学生の作文から，正用，誤用に関わらず助詞「に」が使われている文を抽出し，前接する名詞の種類（場所，時，人，物，事）によって分析した。そして過剰使用が現れた文の特徴を，以下の 3 種類にまとめた。

①「に」の前の名詞が「場所」であり，学習者が「活動」を意図したもの。
②「に」の前の名詞が「時」であり，学習者が「期間」や「時間的範囲」を意図したもの。
③「に」の前の言葉が，数字を含まない「時」であり，以下のいずれかに当てはまるもの。
- 学習者が「頻度」を意図した。
- 「に」の前の言葉が，「時」を表す副詞である。
- あることをした，またはあることが起こった時点を，取り立てて強調する必要がない。或いは，その時点を特定できない。

1. はじめに

日本語の学習者にとって，文法，特に助詞の使い分けは難しいものである。中でも「に」は多様な意味機能を有しており，習得が困難なもののうちの一

つといえる。「に」は，場所や時，人と人との関係等を表す際に幅広く用いられるが，その使用範囲はある一定の条件を満たした場合に限られる。それを理解しなければ，文を産出する際に，「に」を誤って使用したり不必要な「に」を付加したりしてしまうことになる。それは「過剰使用」と呼ばれるもので，「学習者が言語形式の規則の適用範囲を広げ，使用すべき義務的文脈以外の個所でも使用してしまう現象のこと」（近藤・小森，2012，p.53）[1]との定義付けがなされている。本稿においても，この定義に従って論を進める。

初級レベルの学習者が書いた作文には，誤用とみなされる「に」が数多く現れる。そこで，「に」の過剰使用が現れた文の特徴を調べ，今後の指導に役立てようと考えた次第である。

2. 先行研究

格助詞「に」の誤用に関してはこれまで様々な研究がなされているが，以下「に」の過剰使用に焦点を絞って先行研究を概観する。

松田・斎藤（1992）では，初級学習者を対象にした発話データから，「に」の代わりに他の助詞を使用してしまう誤選択が多かったとの結果を提示している。但し誤用データの中には，「で，を，が」の代わりに「に」を使っているものもある。

細川（1993）では，学習者（初級から上級）の日本語作文における誤用例を資料として検討し，助詞の使用，特に「ヲ，デ」を「ニ」としてしまうものや，不要な「ニ」を挿入している例が多いことを指摘している。また，母語別の有意的な差異は発見できなかったとも記している。

久保田（1994）は，英語を母語とする初級学習者による書き及び発話資料において，助詞「に・で」間の機能の混同や，「に」の過剰一般化が観察されたとしている。

八木（1996）は，初級学習者の作文を分析し，場所を表す用法での「に」

の誤選択が「で」よりも有意に多かったことや，時を表す用法での「に」の過剰使用が多かったことを明らかにしている。

福間（1996）では，初級学習者の作文をチェックした結果，調査期間の前半から後半にかけ，「場所」「継続期間や数量，頻度」等を表す語の後ろに過剰な「に」をつける割合が大きく上昇したと報告されている。

中村（2000）は，中級学習者の作文を対象に調査をし，「で（範囲）」型の文型で「に」を使用するものと，「に（ある）」型の文型で「で」を使用する混同率が非常に高かったと報告している。

迫田（2001）は，中級学習者を対象とした「に／で」の使い分けの調査結果から，学習者は「位置を示す名詞＋に」「地名・建物を示す名詞＋で」といったユニット形成のストラテジーをとっているのではないかとの見方を打ち出している。

岩崎（2001）は，英語話者を対象に調査を行い，初級学習者の多くが「に」を過剰生成し，その次の段階で「特定の場所＝に」「一般的な場所＝で」という使い分けを行っているのではないかとの仮説を立てている。

一方，坂本（2002）は，上級の中国語母語話者を対象に調査を実施した。その結果，「に」の過剰一般化や，「位置＋に」（但し，「中に」のみは誤用が多かった。）「場所＋で」といった「一語化」現象はあまり観察されなかったとまとめている。

蓮池（2004ab）では，中級及び上級レベルの学習者を対象に助詞のテストと内省調査を行い，「に」の過剰使用にせよ，ユニット形成ストラテジーにせよ，母語や日本語運用力の影響を受ける可能性があることを示唆している。

呉・王（2009）は，台湾の大学生によって書かれた作文を分析し，1 年生から 2 年生にかけて，「に」の正用率の下がる割合が他の助詞より大きかったと指摘している。

山木（2012）は，台湾の学生によって書かれた作文のコーパスを分析し，

「に」の過剰一般化は認められるものの，特定の名詞と助詞のユニットが使用されている可能性は低いと主張している。

岡田•林田（2016）では，中国語話者に調査を行い，「あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用は，学習者が「場所による移動」があると判断した結果生じた可能性があることを明らかにした。

以上を総括すると，初中級レベルの学習者に「に」の過剰使用が認められる点ではほぼ一致しているものの，その要因については，前後の名詞や述語との組み合わせを過度に意識したもの，文型との関わり，文を産出する際の学習者の判断，母語や教材の影響など，様々な見解が打ち出されていると言える。

3. 作文の分析結果とその考察

本章では，初級学習者によって書かれた作文の中から，正用，誤用に関わらず助詞「に」が使われている文を抽出し，前接する名詞の種類（場所，時，人，物，事）ごとに過剰使用の状況を分析することにより，それが現れた文の特徴を探る。

3–1. 分析の対象とした作文

分析の対象としたのは，南山大学総合政策学部の日本語Ⅰクラス（初級レベルの日本語を学習するクラス）に在籍していた外国人留学生延べ 36 名によって書かれた作文 279 点である。データの収集期間及び人数は，2001 年から 2005 年までの間の 11 名[2)]と，2015 年度秋学期（2015 年 9 月から 2016 年 1 月まで）の 12 名，及び 2016 年度春学期（2016 年 4 月から 7 月まで）の 13 名である[3)]。出身国（または地域）は，中国をはじめ，タイ，台湾，韓国，フィリピンなどであった。コース開始時点での日本語学習歴は，多くの者がゼロに近かったが，母国で数か月程度勉強してきた者や，前の学期に単位が

取れなかったため再履修している者もいた。作文のテーマは，2001 年から 2005 年までは学生が自由に選んだもの（「日常生活，交流会館，日本語の勉強，家族，趣味，休みの日の出来事，旅行」等）であり，2015 年と 2016 年は教師から与えられたもの（「交流会館，家族，将来，趣味，高校，言葉，文化，休み期間中の出来事，自国の紹介，残念だったこと，努力していること」等）である。なお作文は，提出された第 1 稿のみを分析の対象とした。第 1 稿に現れる日本語が，その時点での留学生の日本語運用力に最も近いと考えられるからである。

3–2.「に」が使われている文の分析とその結果

3–2–1. 総数

まず，作文中の「に」の総数を調べたところ，全作文中で正用が 658，「に」を過剰に使っている誤用が 79 であった[4)]。従って誤用率［＝誤用数／（正用数＋誤用数）×100］は，10.7%となる。これに関し，福間（1996）の調査結果では，「に」の不正使用の誤用率が，6 か月の調査期間の前半が 26%，後半が 42%，誤用総数は前半が 13，後半が 32 となっている[5)]。本調査において，誤用総数が多いにもかかわらず誤用率が低かったのは，「に」の正用数も多かったためである。

3–2–2. 場所

まず，「に」の前の名詞が場所を表す文を抽出した。全部で 335 あり，うち誤用とみなされるものは 29 あった。よって誤用率は，29／335 ≒ 8.7%になる。先行研究では，前接する名詞の種類（地名，建物，位置詞）が，「に」の過剰使用と関わりがあると示されている。そこで，名詞の種類と，学習者が意図した「に」の機能（移動，存在，活動，範疇）によりクロス表（表 1）を作成した。

「に」の前の名詞が場所を表す文で誤用が多く現れたのは，以下の二つの

「に」の機能 / N の種類	N に（移動）＋ V	N に（存在）＋ V
地名	例「(故郷)に遊びに来る」 誤用率：0/22=0%	例「(湖名)に魚がいる」 誤用率：1/71=1.4%
建物，施設，自然，交通手段，等	例「荷物を部屋に置いた」 誤用率：2/98=2%[6)]	例「(人)は寮に住んでいる」 誤用率：1/58=1.7%
位置詞，指示詞	例「～の周りに探しに行った」 誤用率：0/4=0%	例「(建物)の中に図書館がある」 誤用率：3/60=5%

表 1[8)]「に」の前の名詞が「場所」を表す文の分類

「に」の機能 / 数字	N に（時点）＋ V	N に（頻度）＋（数字）回＋ V
数字あり	例「4 月に日本へ来た」 誤用率：2/71=2.8%	例「1 週間に 1 回(地名)へ行く」 誤用率：0/5=0%
数字なし	例「春休みに国へ帰る」 誤用率：11/42=26.2%	例×「毎週に 3 回～の番組を見る」 誤用率：2/2=100%

表 2　「に」の前の名詞が「時」を表す文の分類

「に」の機能 / 前の言葉	N ／ V に（目的，変化）＋ V	N へ／に＋ N ／ V に(目的)＋ V
名詞	例「いい味になる」 誤用率：2/38=5.3%	例「店へ食事に行く」 誤用率：0/16=0%
動詞などの用言	例「遊びに来てください」 誤用率：0/27=0%	例「(場所)へ買いに行く」 誤用率：1/33=3%

表 5　「に」の前の名詞が「事」を表す文の分類

タイプの文である。一つは，文末の動詞が活動を表すもの（例「ロビーに友達に会った。」），つまり助詞を「で」に置き換えるのが妥当と言える文である。合計で 20 例あった。この中には，「(場所)にお祭りがある」の文も 2 例含めた。存在を表す動詞「ある」が使われてはいるものの，学習者の意図は「ある場

N に（活動）＋ V	N に（範疇）＋ A
例×[7]「(市名)にバスに乗る」 誤用率：7/7=100%	使用例なし
例×「部屋に準備した」 誤用率：8/8=100%	使用例なし
例×「いろいろな人の前にダンスをした」 誤用率：5/5=100%	例×「(省名)の中にとても有名」 誤用率：2/2=100%

N に（変化）＋ V（「なる」その他）	N に（期間，時間的範囲）＋ V
例「2 時になる」 誤用率：0/5=0%	例×「一日に遊んだ」 誤用率：4/4=100%
例「春になる」 誤用率：0/5=0%	例×「初めにまずくて食べられなかった」 誤用率：6/6=100%

N ／ V に（用途，評価，所要時間）＋ A ／ V	N に（存在）＋ N がある	その他
例「健康にいい」 誤用率：1/14=7.1%	例「(言語)には～文字がある」 誤用率：0/11=0%	例×「～がいろいろにある」 誤用率：6/7=85.7%
例「買物するのに時間がかかる」 誤用率：0/1=0%		例×「体にいいになる」 誤用率：2/2=100%

所でイベントが行われる」であるため，誤用を犯した思考のプロセスは同じだと考えられるからである。

もう一つは，述語として形容詞が使われ，「に」の前の名詞がカテゴリーを表すもの（例「私の高校は，○○省の中にとても有名」）である。2 例あっ

たが，いずれも「に」の前の位置詞として「中」が使われていた。

29 例の誤用を前接する名詞の種類で分類してみると，「地名：8，建物等：11，位置詞：9，指示詞：1」となるので，いずれかの種類に過剰使用が偏っている，とは言えない。つまり「位置詞＋に」のユニット形成が多い，という傾向は認められなかった。ただ，位置詞 9 例のうち 6 例を「中」が占める。これは坂本（2002）の，「特に『中に』という誤用が多い」[9]との結果と一致するものである。

3–2–3. 時

時を表す言葉に「に」をつけたものは，正用が 115，誤用が 25 見つかった。誤用率は 17.9%となり，前述した「場所」の倍以上に上る。どのような文で誤用が現れやすいのかを調べるため，「に」の前の言葉に数字が含まれるかどうか，及び学習者が意図した「に」の機能（時点，頻度，期間，等）は何かにより，「に」の使われた文を分類した。結果を表 2 に示す。

まず「に」には，期間や時間的な範囲を表す機能がないので，学習者がこのような意図で文を産出しようとすると，数字の有無に関わらず非文となってしまう。文例としては，「一日に（一日中，の意）遊んだ」「初めに（最初のうちは，の意）まずくて食べられなかった」「（地名）へ行った日の中に（～へ行っている間に起こった出来事の中で，の意）一番忘れられないことは～です」などがあった。

それ以外の多くの誤用は，前接する言葉に数字が含まれない場合に現れていることがみてとれる。特に，頻度を表す文に「に」がつくと全て非文法的となる（例「毎週に 1 回，～が行われている」）。更に，「来週，今月」など相対的な時を表す副詞に「に」をつけた誤用例もいくつかあった（例「来週にもまた行きたい」）。また，時を表す言葉が「～曜日，朝，昼，晩，夜」などであれば，「に」の有無は正誤に影響を与えないこともある。しかし，行為がなされた時点を特に強調する必要がなかったり，発生時点を特定できな

かったりした場合，「に」をつけると不自然になる。それぞれ，「夜に（地名）で泊まった」「次の日にとても疲れた」のような文がみられた。

そのほか，「（映画を見て）クライマックスに（クライマックスの場面で，の意）少し泣いてしまった。」「〇〇祭に（大学祭の休み期間中に，の意）名古屋へ行った」といった誤用もあった。ストーリーの段階やイベントを表すこのような言葉は，たとえ「時」を表す意味で使われてはいても，直接「に」をつけることはできず，「～の場面，～の時」のような言葉を付け加える必要がある。

3–2–4. 人

次に，「に」の前が人を表す名詞になっているものを抜き出した。全部で101例あり，うち誤用は11例なので，誤用率は10.9%になる。「に」の前の名詞を「一般名詞」と「親族名称・代名詞・固有名詞」に，文型の中の「に」の機能を「N＝受け手，V＝相手への働きかけ」「N＝与え手，V＝物や情報の獲得」「N＝対象または変化の結果，V＝「会う，なる」その他」に分けて表にまとめた。（表3）

「に」の機能 / Nの種類	Nに（受け手）＋V	Nに（与え手）＋V	Nに（対象，変化の結果）＋V（「会う，なる」その他）
一般名詞	例「友達に～をあげた」 誤用率：0/28=0%	例「先生に聞いた」 誤用率：1/6=16.7%	例「作家になりたい」 誤用率：3/27=11.1%
親族名称 代名詞 固有名詞	例「母に電話をかけた」 誤用率：0/15=0%	例「（友人）に～を作ってもらった」 誤用率：1/12=8.3%	例「姉に会いたい」 誤用率：6/13=46.2%

表3 「に」の前の名詞が「人」を表す文の分類

「に」を過剰使用した誤用の例は，殆どが「N＝受け手，与え手」「V＝会う，なる」以外の「その他」のところに含まれる。例としては，「が→に」[10]：「お客さんにどんな顔をするのか楽しみだ」，「を→に」：「（友人）に待った」，「で→に」：「誰にもきれいなトイレを使いたい」，「と→に」：「家族に（地名）へ行く」，「Ø→に」[11]：「誰にも行けなかった」などがあった。名詞の種類による誤用の特徴は特にみられず，動詞の種類による違いも特に見出せなかった。

3–2–5. 物

「物」の後ろに「に」をつけている例は少なく，12 例しかなかった。これを名詞の種類（物体か身体の一部か）によって二つに分けた。（表 4）

「に」の機能 / N の種類	N に（対象）＋ V ／ A その他
物体	例「忘れ物に気がつく」 誤用率：2/6=33.3%
身体の一部	例「体によくない」 誤用率：0/6=0%

表 4　「に」の前の名詞が「物」を表す文の分類

非文法的な文と言えるのは，ともに名詞の種類が物体の 2 例（「周りに海水にあった」と「新品に送る」）だけであった。学習者が言わんとしたことを適切に伝えるための助詞は，作文の文脈からそれぞれ「が／を」であったと推定される。例が少ないため，2 例に共通する特徴は指摘できない。

3–2–6. 事

最後に，「に」の前が「事」を表す言葉になっているものを抜き出した。合計 149 例のうち，12 例が誤用であったので，誤用率は 8.1%になる。「事」の場合，「に」の前につく言葉には名詞も動詞もあるので，まず名詞と動詞（な

どの用言）に分け，それを更に「に」の機能によって分類した。（表 5）

こうしてみると，「事」の場合，文の多くは「～に行く（目的）」，または「～になる（変化）」「～にいい（用途，評価）」であり，「に」の過剰使用は殆ど現れていないことがわかる。誤用とみなされる 12 例は，「ひらがなを漢字に書いた（「ひらがなで書くべきところを，漢字で書いてしまった」の意）」「（遊園地）へ行きに遊んだ（「遊びに行った」の意）」「体にいいになる（「体によくなる」の意）」等であり，まとまった特徴を見出すのは困難である。

3–3. 考察

「に」の誤用例 79 を，前接する名詞の種類で分けると，実数と割合はそれぞれ表 6 のようになる。

N の種類 / 数	場所	時	人	物	事	総計
実数	29	25	11	2	12	79
割合	36.7%	31.6%	13.9%	2.5%	15.2%	100%

表 6 「に」の誤用例の実数と割合

やはり，「場所，時」を表す名詞に後接する「に」の誤用が多いことが，数値にもはっきりと表れている。「人，物，事」は実数が少ない上，誤用例に共通する特徴も見出しにくい。

「場所」に関しては，移動や存在の意味を表す「に」を「活動の場所」にまで押し広げて使っているケースが多い。文型としては，「（場所）に（活動）する」と「（場所）に（活動，イベント）がある」の 2 種類がある。うち前者については，岡田・林田（2016）で示されているように，学習者の頭の中に「その場所へ移動する」というイメージがある[12]ことも可能性として考えられる。

もう一方の「時」においては，泉原（2013）に述べられている「点（時点）」と「線（期間）」の考え方[13)]が参考になる。時を表す「に」をつけるのは基本的に「点」を特定する場合であるため，「線」を表す言葉に「に」がつくことは，頻度を表す表現以外では，ない。従って，数字が含まれない「時」の名詞はもともと「点」と「線」どちらの意味にもなりうるものの，「に」をつけると「点」の意味でしか使われない。例を挙げると，「週末に／○○曜日に」の後ろに「点」を表す「行く／もらう」などの動詞が来るのは問題ないのだが，「いる／雨が降っていた（実際の誤用例）」などが文末に来ると「線」としての表現になるので，すわりの悪い感じがするのである。

また，時を表す「に」の機能のうち，「特定」がポイントとなる場合もある。例えば，「夜に（地名）で泊まった」のような文では，「に」がない方が自然な感じがする。「泊まる」のは通常夜であるし，この文例は「夜」に特別な意味を持たせたものではないからである。

4. まとめと今後の課題

以上の結果から，初級学習者の作文において「に」の過剰使用が多く現れた文の特徴を，以下の 3 種類にまとめることができる。

①「に」の前の名詞が「場所」であり，学習者が「活動」を意図したもの。

②「に」の前の名詞が「時」であり，学習者が「期間」や「時間的範囲」を意図したもの。

③「に」の前の言葉が，数字を含まない「時」であり，以下のいずれかに当てはまるもの。

- 学習者が「頻度」を意図した。
- 「に」の前の言葉が，「時」を表す副詞である。
- あることをした，またはあることが起こった時点を，取り立てて強調する必要がない。或いは，その時点を特定できない。

具体例としては，今回調査した作文の中に，順に①「（場所）に証明書をもらった」，②「週末によく家にいる」，③「毎週に 3 回～の番組を見る」「家族が今月に来る」「次の日にとても疲れた」などの誤用例があった。

上記①及び②については，動詞の種類に傾向があり，

①「場所を表す名詞＋に＋活動を表す動詞」

②「時を表す名詞＋に＋状態性や継続性を帯びた動詞」

と言い換えることができる。「活動」と「状態」は，動きとして相反する動詞である。そこで①と②の動詞を逆にして，

①′「場所を表す名詞＋に＋状態を表す動詞」

②′「時を表す名詞＋に＋活動（短時間で済む，一回きりの動作）を表す動詞」としてみると，それぞれ「場所＋に」「時＋に」の典型的な文になることに気付く。「に」のつく名詞が場所か時かによって，文末に要求される動詞の種類が正反対のものになるのである。これを学習者が混同してしまうことが，「に」の過剰使用を増やしている要因の一つになっている，と言えなくはないだろうか。

ただし実際には，「活動」に近い「移動」を表す動詞もあるし，活動か状態か区別が難しい場合もあるし，更には同じ「時を表す名詞」が時点を表すことも期間を表すこともある。学習者にとって，これらの違いを正確に把握し，適切に「に」を使用する（または使用しない）のは，容易なことではなかろう。

「に」の過剰使用を減らすため，述語とのつながりや文全体の表現意図との関係をいかに学習者に理解させたらいいか。それを探求することを，今後の課題としたい。

注

1）「過剰使用」は，「過剰一般化（或いは，過剰般化）」とも呼ばれ，両者を区

別する論考もあるが，本稿ではほぼ同義と考える。

2）この時点では，まだ南山大学研究審査委員会が発足していなかったため，倫理審査は受けていない。但し，作文を提出した学生からは，「作文データを研究の資料として利用してよい」とするサイン入りの同意書を受け取っている。

3）2015 年と 2016 年の調査については，南山大学研究審査委員会において倫理審査を受け，承認された（承認番号:15–050）。これに沿って，日本語Ⅰ（読解作文）クラスに在籍する留学生に事前に趣旨説明をし，書かれた作文を本調査のために利用してもよいとする同意書へのサインを得た。なお，2016 年度春学期の 13 名のうち，2 名は 2015 年度秋学期の再履修生であった。

4）「一緒に」「本当に」「〜について」「〜ようになる」などの言葉や表現形式の中にも「に」が含まれているが，これらは一まとまりの語句と考えられ，助詞「に」の使い方の適切さを示すものとは認められないので，除外した。一方，文としては非文であっても，「に」の使い方が適切であれば，「に」に関しては正用とした。例えば「誰においしい料理を作るのはとても楽しい」という文は日本語としておかしいが，学習者が意図したのは「誰か他の人に料理を作る」であり，恩恵を受ける者の後ろに「に」をつけるという使い方は間違っていないので，正用としてカウントした。

5）福間（1996）pp. 62, 69

6）「2/98=2%」は,「誤用数／（正用数＋誤用数）＝誤用率」を表す。この場合，正用数は 96 であったことを意味する。以下，同様。

7）「×」は，「に」の使い方が不適切であることを表す。

8）表 1 は，右のページとつなぎ合わせて一つの表になる。表 2，表 5 も同様。

9）坂本（2002）pp. 55, 59

10）「が→に」で, 学習者は「に」を使ってはいるが, 本来「に」以外の助詞（「が，を，で，と」等）を使うのが適切であったことを示す。以下，同様。

11）「Ø →に」は，学習者が不要な「に」を付け加えたことを表す。

12）岡田・林田（2016）p. 59

13）泉原（2013）p. 164

参考文献

泉原省二（2013）『日本語類義表現使い分け辞典』研究社

岩崎典子（2001）「英語母語話者は「で」と「に」をどのように捉えているのか ―インタビュー調査から見えてきたこと―」『平成 13 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 61–66，日本語教育学会

岡田美穂・林田実（2016）「中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の習得」『日本語教育』163 号，pp. 48–63，日本語教育学会

久保田美子（1994）「第 2 言語としての日本語の縦断的習得研究　―格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について―」『日本語教育』82 号，pp. 72–85，日本語教育学会

近藤安月子・小森和子（2012）『日本語教育事典』研究社

呉佳蓁・王敏東（2009）「台湾人日本語学習者の作文に見られる格助詞の誤用について　―初・中級学習者における追跡調査―」『日本語教育研究』55，pp. 58–74，言語文化研究所

坂本勝信（2002）「上級レベルの日本語学習者の助詞の問題点を探る　―存在を表す「に」・動作を表す「で」と自動詞に伴う「が」・他動詞に伴う「を」について―」『南山大学国際教育センター紀要』第 3 号，pp. 51–62，南山大学国際教育センター

迫田久美子（2001）「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー（1）―場所を表す「に」と「で」の場合―」『広島大学日本語教育研究』第 11 号，pp. 17–22，広島大学教育学部日本語教育学講座

中村透子（2000）「中級学習者における場所を表す「に」「で」の誤用」『南山大学国際教育センター紀要』創刊号，pp. 78–94，南山大学国際教育センター

蓮池いずみ（2004a）「場所を示す格助詞選択のストラテジー　―韓国語母語話者と中国語母語話者の比較―」『言語と文化』V.5，pp. 105–117，名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語言語文化専攻編

蓮池いずみ（2004b）「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察 ―中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析―」『日本語教育』122 号，pp. 52–61，日本語教育学会

福間康子（1996）「作文からみた初級学習者の格助詞「に」の誤用」『九州大学

留学生センター紀要』第 8 号，pp. 61–74，九州大学留学生センター
細川英雄（1993）「留学生日本語作文における格関係表示の誤用について」『日本語研究教育センター紀要』5，pp. 70–89，早稲田大学
松田由美子・斎藤俊一（1992）「第 2 言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』第 2 号，pp. 129–156，国際交流基金日本語国際センター
八木公子（1996）「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序
―助詞別，助詞の機能別，機能グループ別に―」『世界の日本語教育』第 6 号，pp. 65–81，国際交流基金日本語国際センター
山木眞理子（2012）「中国語話者における格助詞「ニ」と「デ」の混同問題
―作文コーパスの分析を通して―」『中国語話者のための日本語教育研究』3，pp. 33–46，中国語話者のための日本語教育研究会